

登壇日	登壇者等	推薦図書		
		ジャンル	『書名』／著者名／出版社名	推薦理由、コメント、エピソード等
9月1日(水)	生態学研究センター・教授 高林純示 「昆虫と植物とのコミュニケーション」	今の仕事(研究・進路)を選ぶきっかけになった本	『細胞の社会—生命の起源をさぐる』 岡田節人 講談社	「細胞の」を若い頃読んで、影響を受けたという発生物学者は多いと思う。 私もその一人。 「アンタの専門は発生物学じゃなくて生態学やないか。」はいそのとおり。世の中、きっかけから今に至るまでには、紆余曲折があるもんです。
		今ハマっている本	『メインテーマは殺人』 アンソニー・ホロヴィッツ(著)、山田 蘭(訳) 創元推理文庫	「メインテーマ」の帯に「〇〇賞一位」「各賞を総なめ」とかなんとか書いてあって、ほんまかいなと思いつつ買って読んだ。相当猛烈オモシロイ。「カササギ」もしかり。ホロビッツの他の作品も読まなくっちゃ。
		今ハマっている本	『カササギ殺人事件』 アンソニー・ホロヴィッツ(著)、山田 蘭(訳) 創元推理文庫	
		若者にお勧めしたい本	『夜は短し歩けよ乙女』 森見登美彦 角川文庫	「夜は短し」には、「おともだちパンチ」という奥の手を持ち「ラム酒をそのまま一瓶、腰に手を当てて飲み干したい」というささやかな夢を持つ黒髪の乙女が出てくる。奇想天外な内容と、その乙女にひそかに思いを寄せる先輩との行末も面白い。
		若者にお勧めしたい本	『宵山万華鏡』 森見登美彦 集英社文庫	もう一つは「宵山」。ある日、新快速の向かい合わせ席に座ると、はず向かいの女性が図書館シールの付いたハードカバーの「宵山」を読み耽っていた。何気なく見ると、その人の目が「面白くてしょうがない!!」という形になっている。早速文庫を買って読んでみた。そのとおりだった。
	自分の研究に関連して紹介したい本	『わたしの研究 虫はなぜガラス窓をあけるのか?』 石井象二郎(文)、つだかつみ(絵) 偕成社	あとがきに「まず、生物の生きている姿をみて、おもしろいか、ふしぎだと感じることです。それには何も道具はいりません。みなさんの目の前に、そのような特別な現象はいくらでもあるのですから。自然はもっとも偉大な先生です。」とあるとおり、石井先生とはびっきりのナチュラルヒストリアンだと思う。「わたしの研究」シリーズには「イラガのマユのなぞ」や「アリに知恵はあるか?」などがあり、どれもすばらしい。先生の目にうつる自然の不思議の数々は、私の目が節穴だと教えてくれる。	
9月6日(月)	医学研究科・教授 青山 朋樹 「モノの形と素材で機能を再生する」	若者にお勧めしたい本	『薔薇の名前』 ウンベルト・エーコ(著)、 河島英昭(訳) 東京創元社	見習い修道士のアドンは師匠のウィリアムと共に、北イタリアの修道院で起きた殺人事件の解決を依頼されます。その背景には宗教、政治の込み入った事情があり、その解決にあたって神学はもとより哲学、記号学の知識が必要になります。若者の特権である無鉄砲さ(これは師匠もですが(笑))と知識欲、そしてちょいとほろ苦いアドンの恋を楽しんでください。
		自分の研究に関連して紹介したい本	『坂の上の雲』 司馬遼太郎 文春文庫	日露戦争を日本側、特に秋山兄弟に焦点を当てて描いている戦争小説ですが、その中に「運動」という言葉が数多く出てまいります。陸軍、海軍それぞれにおいて「運動」に勝る方が勝利を手にするのですが、長い航海で乗組員の「運動」性が低下し、艦隊の「運動」能力をさせてしまったバルチック艦隊に対して、「運動」性を極限まで高めて乾坤一擲の痛打を与えた連合艦隊。そしてあまりにも有名な連合艦隊のとった「運動」戦術。「運動」は原子レベルの小さなものから宇宙といった大きな事象レベルにおいても共通して起こる現象です。遺伝子、細胞、組織、臓器、固体、社会いずれにおいても「運動」機能が低下したり、うまくいかない事の原因はけっこう共通しており、「運動」機能を高める方法についても同様です。これらのことから健康な身体を作る際のアプローチとして微視的に、ときには巨視的に考えるきっかけになりました。
9月8日(水)	生命科学研究科・特定助教 平塚 徹 「がんばれば見えてくる!細胞のキモチ」	今の仕事(研究・進路)を選ぶきっかけになった本	『Neuroscience 3rd edition』 Dale Purves Sinauer Associates Inc	大学で初めて通読した英語の教科書かもしれません。分厚いですが、高校までの教科書と違い、研究者目線で書かれた内容で気楽に読め、刺激を受けました。
		今ハマっている本	『哲学講義 1』 ポール・フルキエ(著)中村雄二郎、福居純(訳) 筑摩書房	フランスの高等学校哲学科の教科書です。仕事内容と離れた本を読もうと思ったのですが、高度な論理展開には学ぶことが多く、役に立ってます。

登壇日	登壇者等	推薦図書		
		ジャンル	『書名』／著者名／出版社名	推薦理由、コメント、エピソード等
9月8日(水)	生命科学研究科・特定助教 平塚 徹 「がんばれば見えてくる！細胞のキモチ」	今ハマっている本	『哲学講義 2』 ポール・フルキエ（著）足立和浩，竹田篤司（訳） 筑摩書房	フランスの高等学校哲学科の教科書です。仕事内容と離れた本を読もうと思ったのですが、高度な論理展開には学ぶことが多く、役に立ってまず。
		今ハマっている本	『哲学講義 3』 ポール・フルキエ（著）菅野昭正，原好男（訳） 筑摩書房	
		今ハマっている本	『哲学講義 4』 ポール・フルキエ（著）支倉崇晴，広田昌義（訳） 筑摩書房	
		若者にお勧めしたい本	『うつくしすぎる自然博物』 ベン・ホアー（著），高里ひろ（訳） 主婦の友社	単純に何かを美しいと思える感性は心を豊かにしてくれます。元の英語版 The Wonders of Nature もとてもきれいです。これに限らず、図鑑を眺めることはおすすめです。
		自分の研究に関連して紹介したい本	『Image』ではじめる生物画像解析 三浦耕太，塚田祐基 学研メディカル秀潤社	Imageは研究で非常によく使われる画像解析ソフトですが、無料でだれでも使い、オープンソースです。プログラミングを学ぶのにも楽しいかもしれません。
9月13日(月)	東南アジア地域研究研究所・連携助教 白川 康一 「熱帯地域の感染症 マラリアについて」	今の仕事（研究・進路）を選ぶきっかけになった本	『感染症の数理モデル』 稲葉寿 培風館	COVID-19流行初期に報道等でよく目にされた数理モデルは、感染症の患者の増減を数式を用いて、見えない現象を見える化し、患者数の増加や収束の推定に使用されます。元々生態学における動物の捕食被食関係や経済学などで使用され、感染症疫学にも応用されるようになりました。見えない現象を数式で表現し、私たちの健康や社会生活に関わる内容が興味深く書かれています。私自身、感染症疫学の研究に取り組むにあたって、この本（と著者の先生）がそのきっかけを作ってくれたと考えています。
		今ハマっている本	『京都学を楽しむ 古都をめぐる33の講座』 知恵の会 勉誠出版	京都で長く生活し、現在に至るまで京都大学に居ながら、その周辺のことをきちんと知る機会がなかった時に出会った書物です。京都の人の気質、祭りに食文化に言葉と幅広く書かれています。大学周辺には銀閣寺や吉田神社など歴史的に有名な寺社も多いですが、百万遍や出町柳など不思議な地名も多く、その由来を知るだけでも面白いと思います。
		若者にお勧めしたい本	『論理パラドクス 論証力を磨く99問』 三浦俊彦 二見書房	テレビなどで色々なクイズ番組を見る機会が多いかと思いますが、何かの名称を答えさせるような知識問題が多いように感じます。本書は哲学や数学、論理学などの伝統的、由緒正しい内容が多く記載されており、パズル感覚で読んでいただける内容となっています。ロジカルセンスの鍛錬にお勧めです。また、論理サバイバル、心理パラドクスなどの既刊もあります。
		自分の研究に関連して紹介したい本	『パンデミック―“病”の文化史』 赤阪 俊一，米村 泰明，尾崎 恭一，西山 智則 人間と歴史社	西洋と英国の中世、近代日本でのパンデミック（病）について文化史の視点で書かれています。細菌やウイルスの存在自体明らかにされていない時代において、『感染』とは『接触』することで体が汚れることを意味していました。病原体の存在が知られていない時代で、人々がどのように感染症に立ち向かい、その困難を乗り越えたのか、歴史書を読む感覚で楽しめます。
		自分の研究に関連して紹介したい本	『大気生物学入門』 川島茂人 朝倉書店	花粉症やインフルエンザ、COVID-19などのウイルス感染症と大気（気象全般）との関りについての入門書です。私自身、熱帯地域をフィールドに研究を行う上で、気象や人の行動、環境などのデータを収集・分析を行っていますが、その基本となる項目がわかりやすく書かれており、フィールド調査をしたいと思われる方には参考になる一冊です。

登壇日	登壇者等	推薦図書		
		ジャンル	『書名』／著者名／出版社名	推薦理由、コメント、エピソード等
9月17日(金)	医学部附属病院・特定助教 石本 智之 「疾患モデルの意義と病態解明にむけて」	今の仕事（研究・進路）を選ぶきっかけになった本	『ゲノム編集の衝撃「神の領域」に迫るテクノロジー』 NHK「ゲノム編集」取材班 NHK出版	医学分野においても遺伝子治療が現実となってきております。ゲノム編集の進展について興味深い具体例をあげて紹介していますので、比較的読みやすいです。
		自分の研究に関連して紹介したい本	『脳のなかの幽霊』 V.S.ラマチャンドラン（著）、 サンドラ・ブレイクスリー（著）、 山下篤子（訳） 角川書店	中枢神経の障害によって生じる奇妙で興味深い症状の実例を挙げつつ、脳の不思議について紹介・解説されている一冊です。著者自身が神経科学者でもあります、どちらかと言えば心理学的な切り口かつ平易な表現で書かれており、医学的な専門知識が無くとも楽しく読むことができると思います。
9月22日(水)	工学研究科・教授 横川 隆司 「マイクロ加工技術で創る"イノチ"の器」	今ハマっている本	『小説東京帝国大学』 松本清張 筑摩書房	移動中など時間を見つけて清張作品を読むのが趣味です。単なる推理小説ばかりでなく、フィクションからノンフィクションまで昭和の間の部分や人間性についての描写が、日常の喧噪を忘れさせてくれます。
		若者にお勧めしたい本	『日本のいちばん長い日 決定版』 半藤一利 文藝春秋	夏になると第二次大戦に関わる本を読みます。我々の世代は、少なからず戦争を知る世代と接点があり、それが今でも日々の考え方に影響していると思います。現在の学生は、戦争を直接知る世代と接点がないと思いますので、研究をしばし離れてこのような本を読むのを勧めます。
		自分の研究に関連して紹介したい本	『Fundamentals of Microfabrication and Nanotechnology』 Madou, Marc J CRC Press	修士課程の時に留学したUCLAで教科書として使われていました。この本から、マイクロ・ナノの世界を体系的にとらえるようになりました。
		自分の研究に関連して紹介したい本	『Theoretical Microfluidics』 Henrik Bruus Oxford University Press	学部課程で流体力学を修めた学生向けで、大学院の講義に利用しています。なぜマイクロスケールになると流体操作が難しいのか、それを支える理論は何か、応用まで含めてわかりやすく解説されています。
9月24日(金)	学術情報メディアセンター・特定講師 笠原 秀一 「修学旅行生は、どこに行く？」	今ハマっている本	『トマス・アキナスー理性と神秘』 山本芳久 岩波書店	キリスト教哲学とアリストテレスの教説を統合し、今のヨーロッパ哲学の基礎を築いたトマス・アキナスの入門書です。普段考えたことのない論点がテーマなので読むには手強いですが、非常に興味深いです。
		若者にお勧めしたい本	『ガリア戦記』 ガイウス・ユリウス・カエサル（著）、 国原吉之助（訳） 講談社	簡潔で明瞭な文章が良いです。例えば、研究がビジネスでも大いに参考になる視点と文体を持った名著です。
9月27日(月)	東南アジア地域研究研究所・連携講師 川本 佳苗 「ミャンマーの仏教瞑想について」	今の仕事（研究・進路）を選ぶきっかけになった本	『日本的靈性』 鈴木大拙 岩波書店	親や世間に聞こえのいいようにと大学では社会福祉を専攻した私でしたが、鈴木大拙を知ったことで、仏教を学びたくなり学部を変えて編入するきっかけとなった本です！
		今ハマっている本	『まんが やってみたいくなる オープンダイアログ』 斉藤環、水谷緑 医学書院	仏教では心の要素が細かく分析されています。私も人の心の悩みとどう向き合うべきかについて自殺相談やカウンセリングの研修を受けてきましたが、現在、効果的な実践として注目しているのがオープンダイアログです。
		若者にお勧めしたい本	『対訳 禅と日本文化』 鈴木大拙（著）、北川桃雄（翻訳） 講談社インターナショナル	世界が誇る日本の禅仏教者・鈴木大拙の代表作。オリジナルは英語なので、この本は日本語訳（！）です。対訳になっているので日本文化を英語でどう表現するかという勉強にもなります。
		若者にお勧めしたい本	『火の鳥』 手塚治虫 朝日新聞出版	図書館にも必ず置いてある漫画なので、私も出会ったのは受験生時代の息抜き時間です（笑）。でも何度も泣きました。特に『太陽編』の火の鳥の台詞は、胸に刻んで生きていきます。。。
		自分の研究に関連して紹介したい本	『ブッダのこぼ スッタニパータ』 中村元 岩波書店	仏教について知りたいなら、まずは中村元先生の本がお勧めです。どれもハズレがありません。読むたびお釈迦様の偉大さに感動します。

登壇日	登壇者等	推薦図書		
		ジャンル	『書名』／著者名／出版社名	推薦理由、コメント、エピソード等
9月29日(水)	経営管理大学院（大学院経営管理研究部）・准教授 安達 貴教 「ゲーム理論で考える組閣」	今の仕事（研究・進路）を選ぶきっかけになった本	『ミクロ経済学入門』 西村和雄 岩波書店	ミクロ経済学に真面目に取り組み始めた頃にメインにしていた教科書。現在の研究に深く関わる「不完全競争の経済学」の貢献者の一人であるロビンソンの名前と顔を知ったのは、本書です。
		今の仕事（研究・進路）を選ぶきっかけになった本	『脱「国境」の経済学』 ポール・クルーグマン（著）、北村行伸、高橋巨、妹尾美起（訳） 東洋経済新報社	既存の経済学の拡張を通じて、現実の現象を説明しようとする応用ミクロ経済学の妙に惹かれました。著者のクルーグマン教授は、近年では入門書や時論で広く知られていますが、私は、アカデミックな知見に基づく本書のようなスタイルが好みます。
		今ハマっている本	『交渉術』 佐藤優 文藝春秋	旧ソ連からロシアへの過渡期を現場で経験した元外務省勤務の著者が、外交交渉の舞台裏を活写しており、言わば、「交渉」の生きた教科書とも言えるでしょう。
		今ハマっている本	『大正史講義』 筒井清忠（編） 筑摩書房	「ちくま新書」の日本史シリーズの最新刊。アカデミックな知見に基づく手堅い論稿を読みながら、日本史の古びた知識をアップデートしています。
		若者にお勧めしたい本	『ジェーン・エア』 シャーロット・ブロンテ 新潮社	まとまった読書時間が作れ、徹夜してぶっつけで本を読むことができるのが若者です。ここで挙げているのは、私の乏しい読書体験から判断して、マジョリティーを惹きつけるであろう海外長編小説の二冊です（私自身はまた別に好きな長編小説があるのですが）。
		若者にお勧めしたい本	『赤と黒』 スタンダール 岩波書店	もう一冊挙げると、『赤と黒』ということになるでしょう。作家の故丸谷オー（1925-2012）がとあるネットのインタビューで、登場人物に自分を重ねられるかどうかで自分にとっての好きな小説を判断すればいいというようなことを言っていた記憶がありますが、私の判断基準もまさにそれです（ちなみに、「登場人物」には『源氏物語』の「語り手」のような「人物」も含まれます）。実を言うと、ジェーン・エアも、『赤と黒』のジュリアン・ソレルもその意味ではあまり好きではないのですが、何故か印象に残っている人物です。将来的には、この謎を解明したいですね（笑）。
		自分の研究に関連して紹介したい本	『競争法ガイド』 デビッド・ガーバー（著）、白石忠志（訳） 東京大学出版会	市場における競争を企業が制限しようとする行為に対する法体系である「競争法」については、なかなか一般レベル向けに分かりやすく書かれた書籍が存在していませんが、最近出版された本書は、それに応える内容となっています。「競争法」はその性質上、経済学とも深く関わり、また、私自身は経済学の研究者ですが、本書が、経済学の内容を前提としていない点に、とりわけ感銘を受けました。
自分の研究に関連して紹介したい本	『データとモデルの実践ミクロ経済学 ジェンダー・プラットフォーム・自民党』 安達貴教 慶應義塾大学出版会	本年9月以降に刊行予定の自著です。恥ずかしながらも、出版社の営業努力に応えるために、挙げさせていただきます。私が応用ミクロ経済学で行ってきた研究の紹介を通じて、現代の経済学の雰囲気一般向けに解説した内容となっています。		